

# テランガの国 セネガルには 伝統と前衛が たおやかに共存する

高須奈緒美

ジャパンファウンデーション芸術交流部映像出版課長  
元在セネガル日本大使館文化担当官



たかす なおみ ● 愛知県生まれ、横浜育ち。1986年東京大学教養学部教養学科卒業。同年ジャパンファウンデーションに入り、人物交流部、パリ日本文化会館などの勤務を経て、08年7月より現職。在セネガル日本大使館には、06年4月から08年7月まで出向

ドウドウ・ニジャエ・ローズ(中央)。自ら太鼓を演奏しながら、グループ全体がつくるリズムのうねりをコントロールする指揮者の役割も果たす

撮影：筆者(以下も同じ)



**北** 緯12〜16度、アフリカ大陸最西端に位置するセネガル。詩人サンゴールを生んだこの国は、日本の約半分の国土に20を超える民族と言語が混在する文化多様性の国である。公用語としてのフランス語のほかに、国語だけでも11言語(注1)。国民の9割を占めるイスラム教徒は、アニミストやキリスト教徒と自然な形で共存する。雨季にもほとんど雨が降らない北部砂漠地帯、サバンナとバオバブの林が広がる酷暑の内陸、マングローブが生い茂る西部水郷地帯から南部の多雨穀倉地帯まで、大きく異なる気候と風土も人々の地域的多様性を生む要因となっている。

セネガルは、こうした多民族・多言語・多宗教国家として、長年にわたる平和的文化環境を保ってきた。それを可能にしたのは国民性としての「テランガ」(歓待の心)であると、人々は胸を張る。「見知らぬ人が一夜の宿を求めたら、夕食をともし、自分の寝床を明け渡す。たとえ自分が土間に寝ることになっても」。

テランガ  
歓待の心がすべての人を包み込み  
よそ者を迎え入れる

私自身、2年余のセネガル勤務のなかで数々のテランガに接した。例えば、地方村落を巡回する映画会。電気的な

注1・2008年6月現在。一定の条件（文法やつり等の明文化）を満たせば国語と認定されるので、セネガルの国語は今後も増える傾向にある。



セネガルの海岸地方から内陸部へ入ると、サバンナとバオバブの林が延々と広がる

い村も多いので、発電機やスクリーン、映写機など一切合財をランドクルーザーに積み込んで回り、昼間は小学校や高校でワークシヨップ、日が落ちるのを待って野外で日本映画を上映する。多いときは1000人近くが訪れる会場は、いつも弾けるような笑顔と底抜けに明るい好奇心で埋め尽くされていた。

上映会が終われば、あたりは真の闇。暗闇の中で村人の心づくしの夕食、チエブジェン（セネガル風パエリア）を囲む。直径1メートルはあろうかという巨大な洗面器が床にでんと置かれ、左手に懐中電灯、右手をてんでにつっこんで、車座になって食べる。魚や野菜の一番おいしいところが、右から左から、私の前にポイ、ポイと山積みになっていく。はじめて会ったのに、幼な友だちとどろんこ遊びをしているような、居心地のよさを味わったものだ。

セネガルにも「ガイジン」という言葉がある。滞在中に20を超える村落を訪れたが、どの村でもちいさな子どもたちが、「やーいトゥバブ、トゥバブ」と囃（はや）したてる。トゥバブは「白人」の意。これとは別に「ニヤック」という言葉もあり、こちらは黒人同士でも共通言語がないために話を通じない人を指す。「トゲ

のある垣根」がニヤックの原義だという。テランガはこうしたすべての人をやわらかく包含する。それは、異質なものに對するたおやかな好奇心であるとともに、トゲのある垣根の中によそ者を迎え入れる、コミュニティの覚悟でもあったろう。植民地時代、ヨーロッパ宗主国がつくった「もうひとつの垣根」によってコミュニティと文化を寸断されながら、セネガルが民族と文化の平和的共存を保ってきたのは、よそ者と文化的快感を共有する究極のオペティスムともいべきテランガに負うところが大きいかもしれない。

現在、セネガルにはマリ、カーボヴェルデ、ニジエール、ガボン、ベナン、トーゴ、ブルキナファソ、コートジボワールなどの周辺諸国から留学生やビジネスマン、芸術家などが流入し、さながら西アフリカの縮図のような様相を呈する。テランガはここでも、文化交流の自由度の高さとして、また異文化適応のためのしたたかな現実主義として、セネガル社会にしつかり根づいている。

#### グリオたちが歴史を語りつき 今日に継承・再生する

「ひとりの老人の死は、図書館が丸ごと焼けるに等しい」。歴史考証家アマド

ウ・ハンパテ・バの言葉は、アフリカの伝統社会の継承を表すものとしてあまりにも有名だが、セネガルにおいても、共同体の歴史は、「口承歴史家「グリオ」たちによって語り継がれてきた。もともとは戦場で軍隊の先陣を切り、太鼓で兵士を鼓舞し、遠い故郷に戦果を伝達する役割を負ったといわれるが、グリオが語る王国や民族の歴史は、いまも今日の記憶として人々の心に残り続けている。

ユッスー・ンドゥールやイスマイル・ローなど、アフリカで愛唱されるグリオ出身の歌手の曲にも、こうした歴史を織り込んだものが少なくない。2008年にユッスーが私費を投じて設立したマイクロレジット団体「ピリマ」（同名の曲あり）も、歴史的な王国の君主の名前にちなむものであり、無担保・無証文「口約束だけ」で融資を受ける代わりに、「家族のため、アフリカ人の威信にかけて」、それを返済することを求める独特の融資システムである。

06年6月、セネガル政府は無形文化財の継承を謳い、人間国宝制度を発足させた。初の認定を受けた5人（注2）は、いづれもセネガルの歴史や伝統の多様性を今日に継承・再生し続ける芸術家。

注2 人間国宝 (Teseos national vitamins)

に認定されたのは、ドウドウ・ニジャエ・ローズ(大鼓奏者)、ヤンデ・コバドゥ・セース(歌手)、サンバ・ディアバレ・サンブ(音楽演奏者)、ウスマン・センベース(映画監督)、アバカル・ジョゼフ・ンジャヤイ(奴隷の館館長)。センベース監督は07年逝去により認定解除

注3 本来の読みは「ドウドウ・ンジャヤイ・ローズ」だが、ここでは日本ですでに定着している呼称を使用する



うち3人がクリオとしての認定であった。そのなかのひとり、ドウドウ・ニジャエ・ローズ(注3)はセネガル国民に最も愛される太鼓奏者である。ウオロフ族にして敬虔なイスラム教徒、もてなし好きで義理がたく、おしゃれで少々見栄っ張り。4人の妻と40人を超えるといわれる子どもたちに囲まれ、つねにユーモアたっぷり、祭りのたびに着道楽の妻たちの晴れ着の出費の多さにアタマを抱える、絵に描いたようなセネガル人である。

アフリカのアーティストの国際的な適応性と移動の機動性には目を見張るものがあるが、ドウドウもご多分にもれず、ヨーロッパはもとより、ブラジル、ハイチ、ルワンダ、日本と、国境をものともせずに軽やかに飛び回っている。08年5月の第4回アフリカ開発会議(TICAD IV、横浜で開催)でのコンサートでは、会議のテーマ「元氣なアフリカ」にふさわしく、77歳という年齢を感じさせぬ若々しさで舞台を所狭しと駆け巡り、日本のファンの熱狂的な喝采を浴びた。

アフリカの太鼓を現代芸術として完成し、その前衛性を世界に知らしめる

ドウドウのオーケストラは1987

年に初の来日を果たし、誰も予想だにしなかった一糸乱れぬ太鼓の一大絵巻で日本人の度肝を抜いた。私自身、50人を超えようかという大集団が怒涛のように繰り出すリズムに、文字通り打ちのめされ揺さぶられ、心地よい虚脱感とともにNHKホールを出た20余年前を懐かしく思い出す。

以来、ドウドウの来日公演は実に14回を数え、いまや日本においてアフリカの太鼓といえばドウドウ・ニジャエ・ローズが代名詞になったといっても過言ではない。セネガルにおいても、88年の林英哲・山下洋輔コンサートで皮切りに、鼓童、は・や・と、ヒダノ修一などの和太鼓奏者と交流を深めており、ドウドウ自身、「日本は自分の第二の祖国」と公言してはばからない。

「太鼓によって語る時、自分は太鼓自身となる」とドウドウは言う。ドウドウにとって太鼓とは、人とそ



ドウドウ家の人たちとチェブジェンが盛られた大皿を囲む。魚や野菜のだしとトマトなどで味付けした米料理。米と魚や野菜と一緒に盛りつける

のコミュニティに宿る言霊の直接的なほとばしりである。太鼓は「人が叩く」もの、「人を囁す」ものばかり思っていた私に、「人として語るもの」、「身体からほとばしるもの」としての太鼓文化の奥深さを教えてくれたのが、ほかならぬドウドウであった。

ドウドウはアフリカの太鼓を「現代芸術」として完成させ、その前衛性を世界に知らしめた先駆者である。それまでコミュニティで土俗的に用いられてきた太鼓のリズム・パターンを確立し、打つことが禁じられていた女性を舞台上に上げ、100人もの大編成で「見られ



↑ドウドウ・ニジャエ・ローズと日本の和太鼓兄弟ユニット「は・や・と」とのワークショップ。ドウドウから直接、アフリカの太鼓の指導を受けた。2006年12月



←ドウドウの芸能生活50周年を祝う着飾った女性たち

る「聴かれる」ための変幻を自在に練り広げ、世界中をあつと言わせた。

こうした試みは、初代大統領サンゴールの命を受け、60年代にセネガルとマリの太鼓奏者40人による混成オーケストラを編成し、半年間にわたって欧州巡回した経験が土台になっていると、ドウドウ自身が語っている。

フランス革命200年祭をはじめ、

数々の国際的舞台上でその演奏を披露してきたドウドウは、今年芸能生活50周年を迎えた。08年4月の50周年記念コンサートでは、長年指導にあたったルワンダの女性太鼓グループを自費でダカールに招き、その演奏を披露した（ルワンダの愛娘たちはビザなしでやってきたため空港で足止めを食らい、ドウドウ自ら内務省に駆けつけて大臣と直接掛け合って、何とか入国できたというおまけがあった）。

豊かな文化の営みを継承し  
文化創造の可能性を広げる

セネガルの初代大統領サンゴールが、ネグリチュード（黒人性）を提唱し、文化の復興と普遍的創造をめざして、海外に散った文化人をセネガルに呼び戻したことはよく知られている。ジャーナリストを大統領官邸に集めては自ら文化を熱く語り、連日のように文化人によるサロンを催した。ドウドウも週に3回は大統領に呼ばれ、詩と音楽の夕べを催したと感慨深く語る。

07年、サンゴール生誕100周年を記念して1枚のCDが発行された。『ラッパー、サンゴールを歌う』と題されたこのCDは、彼の代表作をアフリカ各国のラップ歌手が軽快に歌い上げる

もの。サンゴールがいまなお敬愛され、現代に息づいていることをうかがわせる内容となっている。

現在のセネガルはサンゴールの遺産を食いつなぐのみ、若者は欧米や日本に理想郷を求めて国を脱出することに腐心し、芸術家は自らの売りこみと作品の販売に余念がない、とその文化的貧困と実利優先主義を嘆く人は多い。しかしながら、ドウドウ・ニジャエ・ローズの太鼓に対する誠実さと居ずまいの美しき、今日なお新しいことに取り組みあくなき知的好奇心を目の当たりにするとき、あるいはサンゴールをラップに乗せて軽々と歌う若きアーティストたちに心揺さぶられるとき、私はセネガルにおける伝統と前衛のたおやかな共存の軌跡がいまに続いているのを実感する。それは伝統を創造的に継承し、新しい文化を生み出すテランガの究極の姿である

確かに「セネガリテ」（セネガル性）は「サンゴーリテ」（サンゴール性）かもしれない。けれどもその背後に連綿と継承されてきた、かくも豊かな文化の営みと、その前に広がる新たな文化創造の可能性に、身震いするような興奮を覚えるのは私だけではない。